

連城三紀彦

運命の八分休符



運命の八分休符

連城三紀彦

連城三紀彦（れんじょう みきひと）

本名・加藤甚吾

昭和23年、名古屋生れ。早稲田大学第一政治
経済学部経済学科卒業。「戻り川心中」で第
34回推理作家協会短篇賞受賞。

主な著書

「暗色コメディ」幻影城

「戻り川心中」講談社

「変調二人羽織」講談社

「密やかな喪服」講談社

運命の八分休符

昭和五十八年三月二十日 第一刷

定価二〇〇円

著 者 連城三紀彦

発行者 西永達夫

発 行 所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―三

印刷 大日本印刷
製本 大日製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

運命の八分休符 5

邪惡な羊 51

観客はただ一人 101

紙の鳥は青ざめて 155

濡れた衣裳 197

あとがき 236

装帧
安彦勝博

運命の八分休符

運命の八分休符

〈装子〉

ドアにそのノックが聞こえたとき、サリはちょうど唇の半分に口紅を塗り終えたところだった。午後から、ひとりきりのマンションで時間をもて余し、なんとなく料理を始め、その中途でふと気が変わり、鏡台の前に座った。ヴォーグにのっていたリ・ラスキーヌの新しい化粧法をまねてみたくなったのだった——そう、あの眉の撥ね方のほうが、まもなくファッション界に一大センセーションをまきおこそうとしているトップモデルにふさわしいわ。

日に十数回も服を着替えるあわただしい仕事に似合って、サリの気も転々とかわる。

そんなサリの気まぐれに、呆れ果て、吐息でもつくように、台所では細火にかけられた鍋が湯気と肉の匂いをふき始めていた。バリへ行くたび、モデル仲間のジルが御馳走してくれるポトフ——という家庭料理である。

ドアのノックは少し奇妙だった。

あわただしく四度、続いてまた四度——

(誰かしら、こんな時刻に……)

鏡台を離れ、ちよつとためらってから、入口のドアをあけてみる。マンションの廊下に、西陽

を逆光に浴びて、影が立っていた。

その影は、サリを押しつけるように入ってくると、ドアのノブに後ろ手で錠をおろした。

「どうしたのよ、突然——」

サリの目は大きく見開かれた。こんな場所にいるはずのない人物が、突如、目の前に現われた驚愕だった。

なにか嫌な予感が頭をかすめたが、それがはっきり形になる前に、影はその手を、彼女の首にまわしていた。

——首だけはやめて。

思わず、そんなことを叫ぼうとした。

——首だけはイヤ。この首はニューヨーク・タイムズで、東洋の奇跡と絶讃されたものヨ。

だが叫びを声にする余裕はなかった。

わずかの抵抗もできない。百七十センチ、三十二キロという異常な瘦身は、日本中の女性にため息をつかせ、彼女をファッション界のトップの座におしあげてくれた最高の武器だったが、犯人の力から生命を守る武器にはなってくれなかった。

七秒後には床に倒れ、意識が闇にとけこむのを感じながら、犯人が吹いている口笛を聞いていた。

ミミミド—— レレレシ——

——ああそうだ、「運命」だったんだわ、あのドアのノックの音は……四度、続いて四度……でも何故、彼は突然ここに現われたんだろう……なぜ突然、襲いかかってきたのだろう……なぜ、私、死んでいくのだろう。

その夜、同じベートーヴェンの交響曲第五番は、別の場所でも聞かれた。

東京から、六百キロ離れた、大阪、その日生球場——

午後七時には、球場は溢れるほどの人で埋っていた。とはいえナイターの始まる気配とは少し違う。観客のほとんどは女性であり、グラウンドの真ん中に、透明な、ガラスの城が聳えあっている。

午後七時半——きっかり。

それまで初夏の澄み渡った夜に、光の煙をわきあがらせていた照明がいつせいに消えた。

女たちの騒音が広大な闇にのみこまれ、

ミミミド——レレレシ——

突如、地鳴りを想わせる音で、その曲は始まった。闇が巨大な塊となり、凄まじい音とともに天空に碎け散った。

音だけではない。光の塊が浮かび、と思うと惑星が大爆発を起こしたように、無数の原色となつて飛び散った。

「運命」の第一楽章は、八分音符が無数につながり、波となつてうねりまわる曲だが、鮮烈な色彩が、それにあわせて舞い狂い、——突然、また闇。

と思うとグラウンドの中央に、下方からライトがあたる。そのライトの動きで、ガラスの城が地の底からわきあがつたように、虚空へとそそり立った。

もう都会の下真ん中の球場ではなく、そこは古代ギリシャの円形劇場にかわっている。

光の城の一カ所に黒い炎が燃えあがつた——と見えたのは、黒い衣裳で全身を覆いつくした女

である。十二単衣ひともえのように何重にも黒いレースを纏まとった姿は、巨大な揚羽蝶を思わせた。

実際、羽を広げた蝶のように両袖をひらくと、音楽にあわせて舞い始めた。その羽がパタパタひらひら翻る背後から、また一羽の蝶が踊りだす。

デザインはちがうが、衣裳は同じ漆黒——時代がかった大がかりな髪型やメーキャップも黒一色。マスカラ、口紅、そして耳飾り、腕輪などの装飾品まで、黒はガラスの乱反射を浴びて、どんな原色もかなわぬ光沢を放つ。

黒い蝶たちは、みるみる数をふやし、あつというまに城を埋めつくした。闇に隠れた暗い蜜を探しもとめて、蝶たちは軽やかな、だがどこか悲愴な影と重なりあつて舞い狂う。

スポットがいり乱れる。廃墟に古代の月光が蘇よみがえり、化石の蝶たちが幻の命をふき返して踊っているようだった。

(八十×年、鎖とされた時代への葬送)

この珍奇なファッションショーには、そんな副題がついていた。

音楽は、瞬またたくまに後半を迎え、舞台は夜空にうつった。

四機のヘリコプターが運んできた巨大な網を上空に放った。

夜光塗装を施したその巨大な網は、上空の風力に煽あおられ、大都会の夜に、オーロラのようにさまざまな光の模様を織りながら、ゆっくり降りてくる。

球場の真上で大きく波うち、蝶の大群をのみこんだ。蜘蛛くもの巣にかかったように悶えだした蝶をライトが舐めまわす。

音楽のクライマックスが爆発音となって、突然また闇——次の瞬間、ガラスの城が火を噴いた。ガラスではなかったのか、それは一瞬、荘厳ともいえる炎と黒煙を天空に舞いあがらせると、城

ごと崩れた。

炎の残影が、まだ闇を赤く染める中に、

ミミミド—— レレレシ——

「運命」のモチーフがもう一度、奏でられ、それをファンファーレがわりに、上空に一機のヘリコプターが現われた。グラウンドの中央にゆっくり降りたつたその中から、一人の男が姿を見せた。

「レイジー！」

闇の中で女たちの絶叫が反響する。

一点のライトに浮かびあがり、長身を黒のタキシードに包み、黒の蝶タイとサングラスをつけた姿は、異次元からの使者のように見えた。

拍手と歓声がわきおこる。

その喝采に、一度Vサインで答えただけで、男はまた機上の人となり、やがて轟音が夜空に溶けこむと、照明灯がいつせいに点った。

グラウンドからはいつのまにか、蝶も、蜘蛛の巣も、城の残骸も消え果て、そこはいつもと変わりなく、ただの球場である。今までの八分間がすべて束の間の幻想だったというように、わずかな余韻も残さず、消えはてたあとには、芝生が妙に現実的な緑色で、ただ寂寞と広がっていた。

1

「軍平くん？ よかった、いてくれたの。ネ、急用なの。死にかけてるんじゃないかなかったら、すぐ

来て。いつものニッキーって喫茶店——あ、それから、私、装子」

返事も聞かず、相手は電話をきった。

軍平、あわてて、センベイ蒲団をはねのけて起きあがる。

四時近いこんな時刻に寝ていたのは、ただなにもすることがなかったからで、病気で死にかけていたわけではないから、逢いにいかねばならない。

すりきれた茶色のジャンパーをはおって部屋を飛びだす。

廊下で管理人のおばさんとすれちがった。

「あら、田沢さん、どこへ行くの」

「はあ、ちょっと」

とごまかして、アパートの階段をギシギシ降りた。

——波木装子に逢いにいくんです。

そう答えても信じるはずがない。

波木装子。二十五歳。日本ファッション界の売れっ子モデル。男優や画家、野球選手との華麗なスキャンダル。細いが、どこか柔らかみのある体の線。

軍平自身が信じられない。黒い大きな瞳に似合う少女のような声を、軍平もまだつい二カ月前までテレビでしか聞いたことがなかった。

大学を出て三年、定職にもつかずぶらぶらしている軍平に、二カ月前「悪いがガードマンをやってくれないか」カメラマンをしている友人が紹介してくれたのが波木装子だった。マスコミでも売れている装子は当時、脅迫電話に悩まされていたのである。軍平は大学時代に空手をやっていたので、ガードマンという仕事に適任ではあった。

「お前なら波木装子とホテルに入っても週刊誌が騒ぐ心配ないからな」

友人は、どんぐり目にチョココンと眼鏡をかけた軍平をシゲシゲ見ながら言った。

初めて装子にひきあわされたとき、悪戯電話の一件はすでに解決していたのだが、装子は軍平を雇ってくれた。装子を目見た瞬間首のつけ根までまっ赤に染まった軍平が氣にいったらしい。「私に会って愛想笑いしなかったの、あなたが初めてだわ」

雇われたといっても時々電話をかけてきて、食事や酒に二三時間、つきあわされるだけである。金に埋もれ、軍平の一年分の生活費にあたるドレスを毎日とりかえ、散歩にニューヨークへ出かけるといった生活をしている装子は、軍平の薄い髪や、バーゲン品のシャツや穴のあいた靴や、つまり軍平の見すばらしさを息ぬきに楽しんでいるように見えた。

軍平の方は、野暮というか無骨というか、まるで青田の案山子、間ぬけて鯢ぼこぼり、すぐ傍の装子をいつも遠い距離から眺めていた。いや眼鏡の下で、大抵の場合、視線は外されている。自分が見つめるだけで、装子の美しさを冒瀆する気がした。一目見たその時に軍平の恋の花は散っていた。轢き殺される直前に、運転席の美女に一目惚れたような、悲しい一瞬の恋物語だった。軍平、電話が掛ってくるたびにもう逢いにいくのはやめようと思うのだが、気持ちとは無関係に体が動いてしまう。三カ月の契約だし、報酬はもう前金で貰ってしまったのだから、というのが装子に逢いにでかける唯一の弁解だった。

アパートの裏手に放りだしてある赤バイクに跳びのり、エンジンを吹かし、勢いよく、とび出す——といっても勢いよかつたのは意志だけで、ペンキの剝げた中古バイクは、動き出す前から息ぎれしそうな音をたてた。

それでも十五分後、軍平は、そのニッキーというデイズニー・ランドにでもありそうな童話風

の喫茶店に到着。準備中と記されたドアから、こわごわ顔を覗かせた。

カウンターの途中で、週刊誌を読んでいたマスターがひよいと顔をあげた。

「王子様の御到着だ。けど舞踏会は五時までにしてほしいな。五時にはまた店を開きたいから」
装子がいとも待ち合わせに使うので、軍平、海賊船のキャプテンに似たあふれるほどの顎ヒゲのマスターとも、もう顔馴染である。スカウトされる前、装子はこの店でウェイトレスをしていたという。マスターも装子を可愛がっていて装子が来てる間は店に誰も客を入れない。

装子はいちばん奥の席に座っていた。黄色い薔薇の花のようなイヴニングドレスをまとい、毎度のことながら、軍平、その美しさに妙にしんみり悲しさをおぼえた。

「軍平くん、初仕事よ、私を救けてー」

軍平が丁寧に、両膝を揃えて座ると、装子は挨拶ぬきでそうきりだした。

「信じられる？ 私、今、殺人事件の容疑者のひとりなんですって」

素晴らしいニュースでも告げるような笑顔で装子は言った。軍平、驚いて、
「殺人事件って、いったいなんの」

「三日前、白都サリってトップモデルが殺された事件知ってるでしょ。新聞でも大騒ぎしたから」

装子はそう言ってバッグから新聞の切り抜きをとりだした。

——人気モデル白都サリ 絞殺 自宅の浜松町マンションで
という大見出しに軍平も記憶があった。

「いったいどんな容疑がかかってるんですか」

「私とサリ、デビュー当時からずっとライヴァルだったのよ。トップの座を奪いあってるなんて